

氏名	小野 二葉
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 8 4 3 2 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	「ヒューマニズム共同体」の矛盾 —1930～40年代ドイツの政治と文学—

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	相澤 啓一
副査	筑波大学 准教授	DL（文学）	小川 美登里
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	濱田 真
副査	筑波大学 助教	博士（文学）	村上 宏昭
副査	筑波大学 名誉教授	博士（文学）	宮本 陽一郎

論文の要旨

本論文は、ナチスが台頭した1930～40年代のドイツにおいて、その非人間的なイデオロギーと一線を画し、理想の社会のあり方を問い、「ヒューマニズム」と「共同体」を結びつけて描く長編小説を構想した作家たちの作品を取り上げている。具体的には、ヘルマン・ヘッセ、ハンス・ヘニー・ヤーン、トーマス・マンという三人のドイツ語圏作家の長編小説を、著者が独自に構想した「ヒューマニズム共同体」という分析概念を用いて分析することにより、一般には肯定的に評価されがちな「ヒューマニズム」や「共同体」といった理念が内包する矛盾や問題点を批判的に考察したものである。

著者はまず、フェルディナント・テニエスが19世紀末、「ゲマインシャフト（共同体）」と「ゲゼルシャフト（社会）」を対比して論じて以降、近代化とともに成立してきた「機械的」なゲゼルシャフトへのアンチテーゼとして、個人と全体が「有機的」に結びついた「共同体」を理想化する傾向がドイツでは強まったことを指摘する。「共同体」は、現在に至るまでしばしば、豊かな人間関係を育む大切な母体集団と見なされているが、第一次世界大戦敗戦後のドイツにおいて「共同体」への志向はナショナリズムと容易に結びつき、民主主義や共和制に反発する保守派のよりどころとなっている。それがやがて、個人よりも共同体を上位に置く反ヒューマンな方向に走り、ナチズムによる「民族共同体」に行き着くことを、本論文はまず指摘する。

こうしたナショナリスティックなゲマインシャフト信奉に対する対抗軸として、本論文が目指するのは、ナチスに対抗するために「自由・平等・博愛」や民主主義を唱えてヒューマニズムに立脚するゲゼルシャフトを目指した人々ではない。本論文が考察対象とするのは、共同体をナショナリズムではなくヒューマニズムと組み合わせようとした試み、換言すれば、ヒューマニズムをゲゼルシャフトではなくゲマインシャフトと結びつける形で描こうとした試みであり、その例として分析対象となるのがヘッセ、ヤーン、マンの文学作品である。

その際著者は、これらの作品が立脚するとされる「ヒューマニズム共同体」という理念の正負両面を考察することにより、当時の、ひいては現代の社会が潜在的に抱えている問題を考える上で重要な示唆を導き出せるであろうとの仮説から出発する。序章における以上のような理論的考察に続き、三つの長編小説が「ヒューマニズム共同体」という観点から順に分析されている。

ヘッセの『ガラス玉遊戯』(1943)を扱った第一部で著者は、個人主義者と見なされることが多いヘッセが、実は個人と共同体、個人の自由意志と運命など、相反するもののジンテーゼを目指しており、その背景には共同体を「有機体」にたとえる発想があったことを指摘する。そこでは個人と全体の同一性が前提とされ、異なる価値との共生の不可能性という問題が期せずして生じざるを得ないため、混乱する現実の中で普遍的に守られるべき価値とそれを共有する人間集団を描いたヘッセの作品は、価値が相対化した20世紀という時代に「唯一の」真理を言う時代錯誤や閉鎖性から脱する道を示すことができていない、と結論づけられている。

第二部は、「自然」と「精神」を峻別する西欧的な考え方を否定し、生けるものすべての差別なき共感を語ることで共同体の問題を克服するかに見えるヤーンの小説『岸边なき流れ』(特にその第二部「49歳になったグスタフ・アニアス・ホルンの手記」(1949-50))を扱っている。この作品では、有色人種、売春婦、同性愛者、犯罪者、動物など、共同体の庇護から漏れてしまいがちなアウトサイダーたちが差別なく扱われる「相憐みの共同体」、「排除や境界のない共同体」が描かれている。しかし著者は、「自然」を中心に置く人間非中心的な「ヒューマニズム」が、「自然」に従わざるを得ない生物同士の同類相憐みを意味しており、個人の尊厳よりも生命の法則が上位に置かれる結果、たやすく運命の追認へと反転しがちであること、さらにはファシズムという歴史的暴力の前では社会ダーウィニズムにも通じる倫理的問題を抱え込むことを指摘している。

第三部は、悪しき共同体(ファシズム)に対して善き共同体(デモクラシー)を以て対抗しようとしたトーマス・マンが、無媒介に個人と共同体を結びつけようとしたヘッセやヤーンとは異なり、個人と共同体の媒介項として民主政治を置いた点をまず確認する。しかし著者によれば、「上からのデモクラシー」が必要だとするマンの共同体観は重大なジレンマを抱えており、個人と共同体の調和を前提とするゲマインシャフトの矛盾を解消するには至らない。マンの『ファウストゥス博士』(1946)は、こうした共同体観を音楽というメタファーに仮託することで、ヒューマンな共同体という理想が現実化するときに露呈する矛盾を、おそらく作者の意図を超えて描いている、というのが、これまでの定説とは一線を画した著者独自の解釈である。すなわち、主人公の作曲家レーヴァーキューンが用いる「厳格な作曲」は「上からのデモクラシー」に重ねあわせられ、ナチズムと関係づけられることによって、ヒューマニズム共同体のイメージが相対化されているとの解釈である。最後に残る「希望」も「厳格な作曲」の外部に、すなわちファシズムやデモクラシーといった共同体の外にししか見えず、どのような希望なのか具体的に描かれることはない、と確認されている。

以上三作品は、本論文によればいずれも、個人と共同体のジンテーゼという共同体の論理とヒューマニズムの理想から出発した思考の試みが至る帰結、すなわち、「善き共同体」として追求したはずのものが、まさにそれが否定しようとした悪しき共同体に構造的に近づいてしまうというパラドックスを描いている。真理を絶対視する態度は抑圧に、生命法則への従属は暴力の追認に、善意の政治は共同体に対する個人の他律的關係に、何れも転じてしまう。「共同体」と「ヒューマニズム」を結びつけようとしたのは、個人と共同体がアイデンティティを同じくする調和的關係を希求したからなのに、これらの作品はいずれも、それが非同一的なものを許さない反ヒューマニズムに反転する潜在的危険を示している、と著者は解釈する。ゲゼルシャフト的発想が国境を超えた巨大な格差社会へと行き詰っている現在において、「共同体」と「ヒューマニズム」を結びつけようという発想は今日なお魅力とアクチュアリティを持っているが、だからこそ、「ヒューマニズム共同体」の理想と限界を描く作品をめぐる考察は現代の問題を考える上でも有効性を持つ、と本論文は締め括っている。

審査の要旨

1 批評

人間関係が希薄化する現代社会への批判として、個人と全体が有機的・調和的な関係を築く理想的な共同体の魅力が素朴に語られることは、今日でも少なくない。ましてや、ヒューマニズムがネガティブな文脈の中で論じられることは滅多にない。著者はこれらの、もっぱら肯定的な意味でしか用いられない「共同体」と「ヒューマニズム」という二つのキーワードを組み合わせた「ヒューマニズム共同体」という分析概念を新たに定義して用いることにより、ナチスによる犯罪的社会体制への対案を描いた同時代のドイツ文学作品を論ずる上で有効な視座を新たにうち立てることに成功している。その手続きは周到であり、序章ではひとまず文学作品を横に置いて、20世紀初頭のドイツで「共同体」の概念がいかなる文脈で用いられてきたかを、社会学者フェルディナント・テニエスの議論に遡って十分に跡づけることから始めている。

「共同体」という社会学の概念を文学研究のキー概念として援用した著者の学際的視点は独創的である。1930～40年代のドイツ文学を著者のような視点から論じた研究はこれまでほとんどなく、ヘッセ、ヤーン、マンという3人の代表作品が同一の土俵上で論じられたケースも皆無に等しい。他方、個別の作品は緻密に分析されており、必ずしも自明ではない形で小説に内包されている共同体とヒューマニズムをめぐる問題が、書簡など周辺資料も丁寧に読み込むことで詳らかにされた功績は大きい。とりわけマンの作品の個別のモチーフに対しては、説得力ある論拠の提示と論理的解釈により、定説の対案となる解釈が提示されている。

手堅い個別作品解釈の積み重ねに支えられた全体の論旨は明快である。ナチスへの対抗のために期待をこめて動員された共同体の理念が、三作品の何れにおいても根源的矛盾を露呈して袋小路に突き当たっているとの認識、またとりわけ『ファウストゥス博士』における第九交響曲の撤回というモチーフに象徴される形で、ヒューマニズムの理念もまた恐怖の世界に反転する潜在的危険を抱えて破綻しているとの暗澹たる分析は、「共同体」と「ヒューマニズム」の理念に向けられた根本的批判として衝撃的かつ説得的である。

論文の結論としてもっぱら矛盾が指摘され負の認識が多く語られることについては、より肯定的な展望や結論の提示を求める声もあるかもしれないし、意欲的で大きな枠組みの論文であるだけに、他にもさまざまな異論はありうるところである。例えばヘッセ作品に対する本論文での低い評価への異論や、ヤーン作品を全く別の視点から読む可能性の指摘への対応は、全体の理論的枠組みが先行している本論文にとっては今後の課題となろう。共同体やヒューマニズムといった歴史的に非常に多様な使い方をされてきた概念については、さらに広い学際的視野からの考察が望まれる。ただ、これらは本論文のテーマの大きさと射程の長さゆえに生ずる指摘であり、本論文の価値をいささかも貶めるものではない。「矛盾は矛盾として表現されなければならないのだが、それは文学というメディアを通して初めて可能になる」と記す著者には、本論文の成果を踏まえ、文学メディア固有の認識可能性のさらなる追究が大いに期待される。

2 最終試験

平成30年1月24日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。